

8. 副甲状腺機能亢進症患者における ^{99m}Tc -MIBI シンチグラフィの臨床経験

加藤 健志 土持 進作 日野 祐一
中別府良昭 中條 政敬 (鹿児島大・放)

臨床症状とホルモンの検査から副甲状腺機能亢進症が疑われた患者 5 例に対して、 ^{99m}Tc -MIBI シンチグラフィ (以下 MIBI) を施行する機会を得たので、他の画像所見との対比を交えて報告する。5 例のうち、1 例は MIBI の明らかな異常集積は認められなかったが、その他の 4 例では副甲状腺と考えられる部位に合計 8 か所の MIBI の異常集積像を認めた。この 4 例中 3 例 (6 集積) で $^{201}\text{Tl}/^{123}\text{I}$ サブトラクションシンチグラフィ (以下 Tl/I) と比較したが、2 か所で MIBI が描出能に優れ、2 か所は同程度、1 か所は Tl/I の方が優れていた。残りの 1 か所については Tl/I では描出されなかった。最近報告されているように副甲状腺機能亢進症患者に対する ^{99m}Tc -MIBI シンチグラフィの有用性が示唆された。

9. 脳血流シンチにて経過観察した急性散在性脊髄脳炎 (ADEM) の 2 例

中田 博 長町 茂樹 陣之内正史
Leo G. Flores II 小玉 隆男
渡邊 克司 (宮崎医大・放)
糸数 直哉 (同・小児)

症例 1 は 3 歳男児で発熱、右片麻痺で発症した。急性期 MRI で広範囲白質病変がみられ、 ^{99m}Tc -HMPAO SPECT 上、大脳皮質はびまん性の低血流を呈した。白質病変の縮小に伴い、大脳半球皮質は正常血流域に回復した。

症例 2 は 4 歳男児で発熱、頭痛で発症した。急性期の MRI 上両小脳半球、大脳深部白質病変を認めた。急性期の ^{99m}Tc -ECD SPECT 上、全大脳皮質に軽度の血流増加を認め、亜急性期では両側後頭葉、側頭葉、頭頂葉の血流が低下した。

脳血流 SPECT は、病期病態によりいろいろなパターンをとりうる事が分かり、ADEM の病態把握に有用であった。

10. 血小板凝集能抑制剤により著明な脳血流の改善がみられた抗リン脂質抗体症候群の 1 例

徳丸 直郎 吉開 友則 内野 晃
工藤 祥 (佐賀医大・放)
馬場 信夫 松井 真 (同・神内)

症例は 49 歳女性。38 歳頃より繰り返す一過性脳虚血発作の精査目的で当院入院。既往歴に 2 度の流産あり。頭部 MRI では両側前頭葉、基底核、視床の梗塞巣のほか、両側大脳半球に広範な白質病変がみられた。内頸、椎骨動脈造影では異常なし。 ^{99m}Tc -ECD による脳血流シンチでは、MRI で描出された病巣を含み、さらに広範囲な血流低下域がみられた。病歴および抗カルジオリピン抗体陽性、ループスアンチコアグラント陽性などの検査所見から抗リン脂質抗体症候群と診断された。血小板凝集能抑制剤が投与され、症状は軽快した。投与開始 1 か月後の脳血流シンチでは血流は著明に改善していた。脳血流シンチは抗リン脂質抗体症候群の病勢の評価に役立つと思われた。

11. 神経膠腫の悪性度評価における ^{201}Tl -SPECT、Methionine-PET、FDG-PET の比較検討

佐々木雅之 一矢 有一 桑原 康雄
吉田 毅 福村 利光 増田 康治
(九州大・放)

神経膠腫の悪性度評価における ^{201}Tl -SPECT、MET-PET、FDG-PET の有用性を比較検討した。対象は Grade-II 12 例、Grade-III 9 例、Grade-IV 7 例の計 28 例である。 ^{201}Tl -SPECT は 111 または 148 MBq 投与後 15 分より撮像し、対側との集積比 (L/C) にて評価した。MET-PET、FDG-PET は体重と投与量で補正した組織集積量 (SUV) で評価した。 ^{201}Tl 集積は、G-II 1.8 ± 0.7 、G-III 2.8 ± 1.5 、G-IV 5.4 ± 1.4 であり、各群間に有意差を認めた。MET 集積はそれぞれ 2.3 ± 1.5 、 3.3 ± 1.1 、 2.9 ± 0.9 、FDG 集積は 3.4 ± 1.6 、 3.2 ± 0.8 、 3.5 ± 0.8 であり、いずれも各群間に有意差はなかった。以上より、神経膠腫の悪性度の評価には ^{201}Tl -SPECT が有用であり、 ^{201}Tl 集積と MET 集積および FDG 集積には関連はないと考えられた。